

伝説的な自主制作誌「エディファイール」から「10+1」「トンチク」『建築雑誌』に至るまで、様々なメディアの制作に関わってきた五十嵐太郎氏に話を伺いつつ、私たちの活動のあり方を考えてみた。

「オルタナティブ・メディア」は必要か？



私たちが休日を返上してオルタナティブ・メディアを作成する理由はただ「議論したい」というシンプルな動機に尽きるが、「そもそも議論することの意味がわからない」という若い世代の反応も多い。今、我が国の社会からは「議論し、ものをつくる」というロールモデルが失われているのではないか。ゆえに問う。「オルタナティブ・メディアは必要か」。

INTERVIEW with Taro Igarashi

藤村 「エディファイール」を始めたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

五十嵐 あれは南泰裕君と太田浩晃君が始めたのですが、よくありがちだと一歩出したところで潰れそうだったので、僕が建て直して軌道にのりました。東大でも情報が集まる本郷ではなく、駒場にいたので、自分から動かないと埋もれてしまうと考えていました。

藤村 五十嵐さんの場合は「エディファイール」以前にどのような活動をされていたんですか。

五十嵐 一東大は学部二年のときに新人生向けの冊子をつくる仕組みがあつて、普通は100ページくらいの「オリエンテーションパンフ」を作るんだけど、僕の場合は五十六〇ページくらいの少年ジャンプのようなガイドを作ったんですね。記録的な分厚さでした。

藤村 そのとき、既存のメディアとの関係はどんな感じだったんでしょうか。

五十嵐 一院生が直接書く機会がありませんというが、距離が遠くなっていたから、自分たちで同人誌を制作しました。ただ、それでも当時は「SD」の「海外建築情報」や、「建築文化」で「OVERSEAS NOW」という、若手が好きなように書いていい解放区的なページがあつたんですよ。雑誌の部にオルタナティブ・メディアが埋め込まれているような感じでした。

藤村 その当時、五十嵐さんからみて、前例やロールモデルにされていた学生主体のメディアは何かあつたんですか。

五十嵐 一当時、中谷礼仁さんが関わって、「ム」っていう雑誌が早稲田で出っていて、その1号は編集を放棄しているようなところがあつて面白かつ

た。作っている側は履物などニール袋だけ用意して、例えば「〇〇部朝るんだたら各常務君が」「〇〇部コピーもつてきて入れるんですね。チラシのようなデザインなスタイルです。そういう意味では同世代の横の動きは意識しました。

藤村 私たちが大学院にいた頃、「エディファイール」が伝説的だったこともあり、「勉強会」なるものにある種の憧れがあつたんですけども、いくらやろうとしても続かなかつた、という苦い経験があります。代わりに流行っていたのが当時東京理科大の菊地宏さんのグループがやっていた「SHUMAI」という毎週お題を出して即日設計を行なう勉強会でした。五十嵐さんたちの世代が理論と実践のブリッジを試みていらしたのに対し、その下の世代は設計論やコンペの戦略論といったアウトプットが重視されていることについては、どう思われますか。

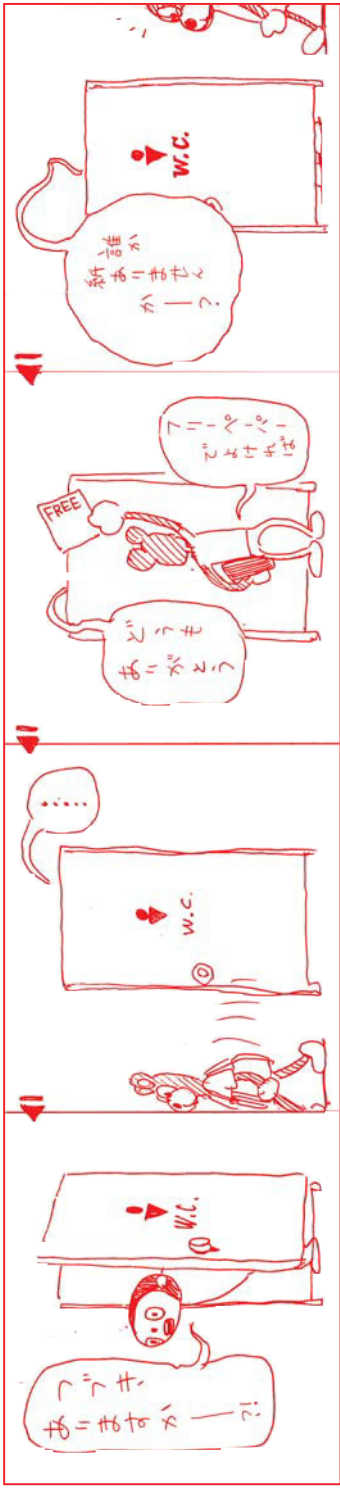
五十嵐 「エディファイール」の特徴は、歴史系う人と原研の意匠系う人の組み合わせだったことですね。一般的な知のモードも、脱構築主義的な哲学からフィールドワーク的な社会学にシフトしたし、こ難しい現代思想を読みたい人雰囲気はなくなりましたね。最近の院生は、昔に比べて真表紙をどんどん書かないといけないので、自分の専門と関係ない本を扱う読書会が成立しにくいという状況もあるようです。

藤村 なるほど。そういう環境から今度は「10+1」の活動につながつていったということですよ。その後、名古屋で学生の活動をオーガナイズされていますね？

五十嵐 一名古屋がユニークだったのは、ギャラリーや本屋のあるビルで、学生が運営するカフェを中心に活動していたことです。僕のアイデアで軌道に乗つたのは「アーキレクチャー」のシリーズですね。往復の交通費と宿泊費まで何とかすれば、若手ならレクチャーに応じてくれると助言したことで始まりました。「CHAT」というフリーペーパーも継続していますね。

藤村 東北大学に移られたあと、「トンチク」を出されましたね。タブロイドの形式を選ばれた理由はありましたか？

五十嵐 一単純にお金と時間がなかったことす



©2007, Yu Masuko

本ページでは、建築都市系のフリーペーパー等を製作しているグループに『建築雑誌』を乗っ取ってもらい、様々な活動を紹介していく。今回取り上げる『ROUND ABOUT JOURNAL』は、設計事務所等に勤務するメンバーによって「議論の場を設計する」を合い言葉に製作されるフリーペーパーである。2007年3月に第1弾(vol.1+2)を、12月に第2弾(vol.3)をそれぞれ発行した。編集＝藤村龍至＋山崎泰寛、編集協力＝伊庭野大輔＋藤井亮介＋松島潤平＋本瀬あゆみ＋刈谷悠三、発行部数5,000部。(藤村龍至)

ね。東工大の「ム」や東京芸大の「空間」のような、ちゃんとした雑誌をつくるとなると大変です。でもタブロイドは最小限の労力ですくれますしね。阿部仁史さんのパーティ会場で、新聞配達少年のように「トンチク」を配ったのですが、コミニティーという手法としても効果的でした。

藤村 今回、五十嵐さんは『建築雑誌』の編集を担当されることになったわけですが、二年間を通してこういうことをやってみたいっていうのはありますか？

五十嵐 一まずは変えること、記憶に残ることが目的ですね。自分で書きたいことは他の媒体でもできますからね。むしろ、学会誌ならではの建築の専門を横断するような特集、まさに「雑誌」を考えてみると、建築自体がいろいろな技術をたばねる雑誌的な志向をもっていますよね。また1月号の「建築雑誌は必要か？」もそうですが、啓蒙的に「これを知りたい」というよりも、論争を呼ぶ問題を提示し、「テーマ自体を疑いながらやる」という方法は通奏低音になるかも知れません。そのせいで、五十嵐委員会は毎回異常に時間がかかる姿。

伊庭野 「変えたい」というのは、今の『建築雑誌』が良くないと感じていらしやうということですか。

五十嵐 一いや、まだまだ掘り起こせる可能性があるということです。ただ、三万五千部を発行する『建築雑誌』は、部数的としては専門誌のスケールを超えているのに、専門誌であれという引き裂かれた命題がそもそもありますよね。

藤井 三万五千部っていうボリュームに対して何か戦略はありますか。

五十嵐 一読みやすくする工夫はいろいろ試みるとしても、全会員が全ページを熟読するのが目標だとすれば、基本的には勝ち目がない戦いですよね。でもまず今回は大特集主義を解体して、読むところかきを増やすことを試みます。『建築雑誌』に限定せず、いわゆる「学会誌」の起源を考えると、会員同士の情報交換がそもそもの目的だから、エッセイライターみたいなものから始まっているわけですよね。本来は後にある情報ページの方が先で、前にある特集のほうがお

まけなのです。しかし、どんな組織もそうでしょうが、会員数があるスケールを超えたところで、さまざまな専門をもつ全会員の関心を常にひきつけるのは難しくなる。どうやっても全員が読むわけではないし、泣いても笑っても2年の任期だから、好きなようにやるという考え方もあります。

本瀬 一フリーペーパーとかローカルなものってコミニティを引く強さってあるところがあつて、「トンチク」だと仙台の学生や建築家とか、そういう人たちのアウトプットになっている部分に対して個人的に結構構えてるんですけど。

五十嵐 一やはりフリーペーパーはコミニティのなかのマイノリティの声を表現するメディアなんじゃないですか？ 実際は書いた内容よりも、そのときに得た人のネットワークが後で役に立つと思いますね。僕もそうした場を通じて、初めて同世代の建築家たちと出会いましたしね。

松島 一外部の人間にフィードバックされることはなですか？

五十嵐 一すぐ外部にフィードバックするのなら、もっと社会ネタにダイレクトに関わるアグレッシブなテーマが必要ですよ。建築の内輪話じゃ外部の人は読まない。ただ、『建築雑誌』はそもそも書店売りをしないメディアだから、もともと読み手が限定されていますよね。特集の良し悪しが売り上げによって評価されることもない。だから、ぶれずに制作できる長所と時代に鈍感でありえるという短所の両方があります。

藤村 その意味ではオルタナティブ・メディアは、基本的に「自分が議論したくて世で議論されていない」と思っていることをやればいいと思いますね。

五十嵐 一Rは五千部も聞いただけで、普通の建築雑誌より多い姿。部数だけ見ると、もはや建築界では「オルタナティブ」ではないよね。

藤村 では、最後にオルタナティブな活動を志す若い世代にメッセージをお願いします。

五十嵐 一「続けて下さい」ということですね。ブログでも何でもそうですけど、「続ける」というのが、一番難しいですからね。

二〇〇七年十月二八日 自由が丘にて